

令和 7 年 6 月 16 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K00283

研究課題名（和文）岩国市に伝存する和漢古典籍の分類総合目録作成に関する研究

研究課題名（英文）Research on the creation of a comprehensive classification catalogue of Japanese and Chinese classical books preserved in Iwakuni City

研究代表者

妹尾 好信（Senoo, Yoshinobu）

二松學舎大學・文学部・教授

研究者番号：10171357

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：山口県岩国市には近世後期から明治期にかけて書写・刊行された古典籍が多数伝存している。岩国徴古館には旧藩主吉川家が寄贈した図書類約3,000点と、同館が収集した古書資料約1,000点が収蔵されている。また、市立中央図書館には市内の旧家や名家から寄贈された和装図書が約1,500点、さらに市立岩国学校教育資料館にも明治期の教科書や和古書類が約850点所蔵されている。

研究代表者は長年にわたってこれらの資料を閲覧調査し、所蔵機関ごとに目録の作成やデータベースへの書き込みという形でその成果を公開してきた。本研究では集積した書誌データを整理し、所蔵機関を横断して検索可能な分類総合目録を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

和漢の古書・古典籍が近世期に地方の中心都市であった城下町においてどのように伝存しているのかを知ることが学術的に極めて重要である。特に貴重な資料については、国や自治体が文化財に指定して厳重に管理されているが、一般の写本・版本や草稿本の類は、どのような内容のものがどのくらい残っているのか把握することが難しい。図書館や博物館などに分蔵されていればなおさらである。今回、岩国市が運営する3つの施設に所蔵される和漢古典籍の悉皆調査に基づく正確な書誌データを整備し、3館を横断して検索可能な分類目録を作成したことは、岩国のみならず近世後期の小藩における文化活動の実態の解明に大いに役立つことは疑いない。

研究成果の概要（英文）：Iwakuni City has a large number of classical literal materials that were transcribed and published from the late Edo period to the Meiji period. The Iwakuni Chokokan Museum houses approximately 3,000 books donated by the former feudal lord Kikkawa family, as well as approximately 1,000 old books and documents that the museum has collected on its own. In addition, the city's central library houses approximately 1,500 Japanese-bound books donated by old and distinguished families in the city, and the Iwakuni Educational Museum of Archive Collection also houses approximately 850 textbooks and old Japanese documents from the Meiji period.

The principal researcher has been examining these materials for many years, creating catalogs for each institution and writing entries in databases, and publishing the results. In this study, the accumulated bibliographic data was organized to create a comprehensive classification catalogue that can be searched across institutions.

研究分野：書誌学

キーワード：岩国市の古典籍 吉川家寄贈図書 岩国徴古館資料 岩国市中央図書館和装図書 岩国市立学校教育資料館蔵書

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始にあたっては、それまでに続けてきた岩国市に伝存する和漢古典籍の悉皆調査と目録作成に関する研究の継続と総括の意味があった。研究代表者は、2001年と2002年に国文学研究資料館の文献資料調査員として岩国市中央図書館において同館が所蔵する和装図書の書誌調査を行った。その時に、同館には江戸時代後期から明治時代にかけて書写・刊行された多数の和本類が存在するが、台帳はあるが目録が公開されておらず、ほとんど誰にも知られず利用されないままになっていることを知った。その後、それらの悉皆調査を志し、2010年から年数回同館を訪れて書誌調査を始めた。

また、旧岩国藩主吉川家から岩国市に寄贈された図書類は岩国市立岩国徴古館に存在することが知られていた。それらの書目は、岩国徴古館が1992年に刊行した『吉川家寄贈図書類目録』に記載されているが、書誌情報はごく簡略で、分類もおおまかなものである。こちらについても悉皆的な書誌調査の必要性を感じた。

そこで、2011年度から2014年度まで、科学研究費補助金 基盤研究(C)「岩国市に伝存する吉川由来書を中心とした古典籍についての調査研究」を得て、本格的な調査を始めた。

その調査の成果は、『内海文化研究紀要』第40号(2012年3月)から第45号(2017年3月)まで6回に分載して「岩国市中央図書館所蔵和装図書目録稿」(1)～(6)として発表、第47号(2019年3月)には書名索引を掲載した。

岩国市中央図書館の調査を一通り終えると、岩国徴古館の調査に移った。同館ではホームページ上に「収蔵資料検索システム」があって、『吉川家寄贈図書類目録』および徴古館が独自に収集した資料類の目録『岩国徴古館資料目録』(1996年刊)に載る簡略な書誌情報がアップされているので、これに詳しい書誌情報を書き込む形で調査を行った。「吉川家寄贈図書類」が約3000点、「岩国徴古館資料」中の「典籍」が約1000点で、計4000点ほど存在するため、調査には長い期間を要した。また、岩国市が運営する岩国学校教育資料館にも江戸期の寺子屋や明治時代の学校教科書の類が多数所蔵され、展示もされていることがわかったので、徴古館の調査と並行して学校教育資料館の調査も始めた。

この研究を引き継ぐ形で、2016年度から2020年度まで、科学研究費補助金 基盤研究(C)「岩国市に伝存する和漢古典籍の総合的研究 分類総合目録の作成に向けて」を得ることができた。この研究では、岩国市中央図書館・岩国徴古館・岩国学校教育資料館の市立3施設が所蔵する和漢古典籍のすべてを調査し、詳しい書誌情報を載せた目録を作成するとともに、いずれは3施設の蔵書を総合的に検索可能な分類目録を作成することを目指すことにした。

岩国徴古館の書誌調査は終えたが、「収蔵資料検索システム」に掲載する各資料の画像を撮影する作業を加えたことと、学校教育資料館には約850点という予想以上に多くの和古書が所蔵されていることがわかったため、5年間の研究期間ですべての調査を終えることはできなかった。

学校教育資料館調査の成果は、『内海文化研究紀要』第49号(2021年3月)から第51号(2023年3月)まで3回に分けて「岩国市立岩国学校教育資料館所蔵和古書分類目録」として掲載し、書名索引も添えた。

これまでの研究で、岩国市中央図書館と岩国学校教育資料館が所蔵する和古書については、学術雑誌掲載の目録として、岩国徴古館所蔵の典籍類については同館ホームページ上の「収蔵資料検索システム」記載のデータとして、それぞれ詳しい書誌情報が閲覧できるようになったのである。

2. 研究の目的

本研究は、上記のように10年以上にわたって継続してきた岩国市の市立3施設、岩国市中央図書館・岩国徴古館・岩国学校教育資料館が所蔵する近世後期から明治時代頃までに書写・刊行された古典籍に関して、詳細にして正確な書誌情報を掲載した分類目録を整備し、3施設を横断して検索できる総合目録の形で研究者や一般社会人の利用に供することを目的とするものである。

3. 研究の方法

これまでに調査して作成した3施設の目録やデータベースでの書き込みを「分類総合目録」とするためには、できる限り掲載する書誌情報の内容をそろえる必要がある。なにしろ10年以上の長期にわたって行ってきた調査であるため、調査環境も格段に変わった。最も大きな変化は、書誌事項の検索にインターネットによる情報が使えるようになってきたことである。最初に岩国市中央図書館で調査を始めた頃には、参考にできたのは図書館に備えられた郷土図書の類である。岩国徴古館の資料閲覧室で調査を始めた頃も、閲覧室に配架された市史や県史などの図書が主な参考文献であった。3施設とも閲覧室にWi-Fi環境はなかったが、次第にポケットWi-Fiの導入やスマートフォンの使用などによってインターネット検索ができるようになって、書目や著者、版元などに関する情報が容易に入手できたため、後年になるほど書誌情報が正確になり、

充実してきた。「総合目録」化に際しては、調査初期の頃の書誌情報の充実化をはからなければならぬ。これはなかなか時間のかかる作業であった。

また、分類は、日本の古典籍の分類・配列の標準をめざすこととし、各書目の分類は『国書総目録』の分類名に従い、配列は、国文学研究資料館が提示している「『国書総目録』分類項目」一覧の配列を基本とすることにした。ただし、対象書目には『国書総目録』や国文学研究資料館の「国書データベース」に載らない明治以降の刊行物や草稿の類も多いので、分類の決定には改めて資料を閲覧し直すことが必要になることもしばしばであった。

当初は、3館の所蔵書目を一体化して文字通りの「総合目録」を作成することも考えたが、3館それぞれの蔵書の特色を可視化することも大切であることに鑑みて、「岩国市中央図書館和装図書」、「岩国徴古館吉川家寄贈図書類」、「岩国徴古館資料」、「岩国市立学校教育資料館教科書類」、「同文書類」、「同郷土資料類」の6つに分け、すべてを統合した書名索引を作成することで「総合目録」としての機能を持たせることにした。

岩国学校教育資料館の目録は先に作成した雑誌掲載のものがそのまま使えるが、岩国市中央図書館の和装図書については、図書館が各資料に付したNDC分類番号の順で配列した目録を作成したため、今回の「総合目録」化にあたっては分類をことごとく改める必要があった。約1500点の分類をし直すにはかなりの労力と時間を要した。岩国徴古館の調査はデータベース(Excelファイル)に書き込む形で行ったため、分類に基づく配列と目録原稿の作成に多大な時間を要したが、近世期の資料が多いため、『国書総目録』の分類名と付き合わせるのは比較的容易であった。

6つの目録に収める6000点を超える書目を統合して書名索引を作成する作業は、書名に目録内の通し番号をあてるため、すべての目録の配列が確定してから行わなければならない、大変に難渋する作業となった。

なお、吉川家伝来の特に貴重な資料は公益財団法人吉川報効会が運営する吉川史料館に保管されており、それには典籍も含まれるが、すでに詳細な目録が「吉川家歴史資料目録」(1984年山口県教育委員会)として刊行されており、他の3施設が岩国市営の施設であるのとは異なるため、今回の「総合目録」作成からは除くことにした。

4. 研究成果

当初の計画では、書誌情報の整備と分類名の確定作業を2022年度までに行い、広島大学退職後で時間的余裕ができる2023年度に分類総合目録の原稿化と書名索引の作成を行う予定であった。

ところが、思いもかけず、2023年度から東京都千代田区にある二松学舎大学に勤務することになって、研究環境が大きく変わった。東広島市から隣県の岩国市までの往來を前提に構想していた書誌情報確認のための閲覧調査旅行もままならず、何より勤務のための東京への往き来で時間と労力を費やすため、研究時間がなかなかとれなくなった。やむを得ず、1年間の研究期間延長を願い出て認めていただいたが、延長後も十分な研究時間がとれず、2025年6月現在、「分類総合目録」はいまだ完成していない。

しかしながら、目録原稿の作成は次第に完成に近づいており、それができればあとは書名索引の作成のみである。

まだしばらく時間がかかることは避けられないが、できるだけ早く完成したい。完成後は、広島大学または現勤務校の二松学舎大学付属図書館のレポジトリーを通して誰でも閲覧・活用できる形で公開したい。岩国市のホームページにもリンクを張りたいと思う。10数年という長きにわたる研究である。拙速を避けて、多くの人の利用に堪え、自分でも納得のいく形で「分類総合目録」を完成させたいと願っている。

6万石という小藩であった岩国だが、その学問・文化レベルの高さは並々ならぬものがあった。そのことをこの「分類総合目録」は如実に教えてくれるものになるはずである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 妹尾好信	4. 巻 51
2. 論文標題 岩国市立岩国学校教育資料館所蔵和古書分類目録 「郷土図書」資料の部、並びに書名索引	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 内海文化研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 妹尾好信	4. 巻 50
2. 論文標題 岩国市立岩国学校教育資料館所蔵和古書分類目録 「文書類」資料の部	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 内海文化研究紀要	6. 最初と最後の頁 25-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------